何を神の御業(みわざ)と信じるのか

ヨハネ9章1~12節
2021年2月21日
松田 基子 師

今年も、2月の17日に、灰の水曜日を迎え、受難節に入りました。 イエス様は、罪に縛られ、永遠の滅びに引きずり込まれていく人類を救うために、神の子の位を捨てて、人の世に生まれ、全人類の全ての罪を一身に負って身代わりの十字架に架かり、全人類の罪を贖い、人類に救いの道を開いて下さいました。 神様は、そこに御子イエス・キリストを信じる者に、救いをお与えになりました。 この事は、神様の、一方的な人類に対する愛と憐れみによるものです。

この恵みに対して、人はどの様に応答するのでしょうか。 イエス様の時代のイスラエルは、エルサレム神殿を中心に、信仰活動はとても盛んでした。 イスラエルは自分達が、神様に選ばれた民であり、神様から律法を与えられていることを誇りとしていました。 彼らにとって、律法は神様からの掟、命令として絶対的でした。 しかし、彼らは、神様が何故そのような掟を与えられたのか、神様の愛の御心を、神様に尋ね求めて行く事をしないで、ただ違反にならない様に、周りから批判されない様にと、表面的な生活をしてしまいました。 その結果、彼らは、**律法の字面に捕らえ**られてしまったのです。 それが如何に神様の御心に反したことであったか、その原因が、**自己を絶対化し**た、実のところは、神様に従っていない、**表面的な信仰であることが**、今朝のヨハネ9章の記事から分かります。

律法の番人となって、律法の字面で人を裁いていた律法学者や、ファリサイ派の人々は、イエス様が語られる言葉や行動の真意を、受け取ろうとしないで、一方的に、イエス様を律法違反者として危険視していました。 その日も神殿の境内で、イエス様と彼らの話は噛み合わず、彼らはイエス様に向かって、石を投げつけようとしました。 そのためにイエス様と弟子たちは神殿の境内を出て、城外に向かわれました。
その時です。 9章1節を見ますと、

「**さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。**」

とあります。 イエス様は命の危険に晒されて、境内から、周囲には目もくれず、一目散に走って逃げられたと言うのではありませんでした。
イエス様は何時も御自身の事よりも、弱い立場の人々に心を注いでおられました。

イエス様が神殿の境内から出てこられますと、城外への道路沿いには、神殿の参拝者たちに、施しを求める人々が座って、物乞いをしていました。 そこに、生まれつき盲目の人がいました。
イエス様がその人に目を留められたことによって、弟子たちの視線もその人に注がれました。
すると、弟子たちから、質問が投げ掛けられたのです。

「**ラビ**(先生)**、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。 それとも両親ですか。**」

との問いです。 今日の私たちはこの言葉を聞いて、

『イエス様の弟子ともあろう者が、何と人権意識がない、イエス様と一緒にいて、何と愛のない人達なのだろう。』

と思います。

しかし、この様な考えは、紀元一世紀の弟子たちの社会の考え方だったのです。 ここで注意したいことは、弟子たちの言葉に表されていますように、人は誰もその時代、その時代の教育、価値観の中で育ち、完全に抜け出ることは、出来ないと言うことです。 その言葉は、弟子たちが生きた時代の考え方でした。 イエス様はそこに、神様からの光を当てて、その間違いを正されます。 ここにはイエス様の修正がこの後、示されていますので、間違いが正されるのですが、今日のキリスト者も、聖書の字面に捕らわれると、大きな間違いを犯します。 例えば、当時は重い心の病について、今日の様な医学的な解明は成されていませんでした。 そのために悪霊に取り憑かれていると考えました。 ところがその時代から二千年経った今、医学的に解明され、原因が分かって来たにも拘わらず、聖書に書いてあるから、悪霊の所為(せい)だと言って、病気の人を苦しめるキリスト者がいるのです。

聖書も、字面で読んではいけないという事を、私達はよくヨク心しなければなりません。 聖書を読む時にどうぞ、皆さん、

『御心を示して下さい。
　イエス様の心を教えて下さい。』
と祈りながら、御言葉の真意を読み取って下さい。 では、イエス様は何と言われたでしょうか。
3節に、
「**本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。 神の業がこの人に現れるためである。**」
とお答えになりました。 そして、イエス様は、地面に唾をし、土をこねて、その人の目にお塗りになりました。 この行為は二千年前の当時、一般的に行われていた医療行為だと言われています。

イエス様は盲目の男性に、そのように手当をされますと、
「**シロアム**（遣わされた者という意味）**の池に行って洗いなさい。**」
と言われました。 シロアムの池はヒゼキア王（BC715-687 在位）の時代に、城外のギホンの泉から、地下トンネルを掘って、城壁内に水を引き入れた貯水槽です。南北 17.4m、東西 5.4m、深さ 5.7m あると言います。 イエス様がわざわざ、
「**そこに行って洗いなさい。**」
と言われたのには、意味がありました。 シロアムと言う意味は、
『遣わされた者』
と言う意味です。 イエス様は彼に、
「**その池に行って洗いなさい。**」
と言われる前に、4節で、
「**わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のある内に行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。 わたしは、世にいる間、世の光である。**」
と言っておられます。 イエス様は、御自身が、神様から**遣わされ者**、**メシアとしての意識**を持っておられました。 そのために、宗教指導者を始め、律法主義のユダヤ人たちは、イエス様を殺そうとしていました。

イエス様は十字架が迫っていることを意識しておられ、時を惜しんで、働かれました。 その間、御自身が世の光として、神様の真理を示されるのです。 一方、盲目の男性はイエス様が誰であるか、分かりませんでしたが、イエス様に全信頼し、その身を任せ、何の疑いもなく、言われた通りにシロアムの池に行って目を洗ったのです。すると、見えるではありませんか。 彼は喜びに溢れ、勇んで家に帰って来ました。

彼は、家族や、近所の人に、自分の身に起った事を語らずにはいられませんでした。 ところがその喜びの様子を、ある人達は、
「**これは、**（神殿の道に）**座って物乞いをして居た人ではないか。**」
と言う人もいれば、
「**いやいや違う。 似ているだけだ。**」
と言う者もいました。 しかし、本人は
「**わたしがそうなのです。**」
と主張しました。 すると人々は、彼に尋ねました。
「**では、お前の目はどのようにして開いたのか。**」
それは人々が最も興味ある質問でした。そこで、11節に、彼は答えました。
「**イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい。』と言われました。 そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。**」
と彼は、何も脚色せず、ありのままをその通りに、説明しました。 人々はその答えに、
「**その人は何処にいるのか**」
と尋ねましたが、彼は、
「**知りません。**」
と答えました。

彼は、自分の人生が変えられる、大きな恵みを受けながら、それを成して下さった方の正体を、まだ知りませんでした。 人々も何故イエス様が
「**シロアムに行って、洗いなさい。**」
と言われたのか、そこに、意味を見出してはいませんでした。 ところで、ここで、私達が考えたいことは、イエス様が弟子たちに、
「**神の業がこの人に現れるためである。**」
とお答えになったことの意味を、
『ああ、それは彼の目が開かれた、この奇跡の事を言われたのだな・・・』
と思ってしまうのではないかということです。 私達は 神の御業が現れると言う事を、この様に、病気が治ったり、事業に成功したり、困難な問題が解決したり、不可能と思っていた事が実現した、 など、成功物語を得ることで、神の御業が現れたと言う風に、思っていないでしょうか。
盲目の男性の癒しは、決してそういうことを

言っているのではありません。 人間は如何に自我にしがみつき、自己中心で、神様の御心を求めようとしないのかが、この後展開されて行きます。 人々は、自分達に納得がいかないために、彼を信仰的だと思われていた、ファリサイ派の人々のところへ連れて行きました。 ファリサイ派の人々もまた、同じ様に、

「**どうして見えるようになったのか。**」

と尋ねました。 15節に、彼は、

「**あの方が、わたしの目に、こねた土を塗りました。 そして、わたしが洗うと見える様になったのです。**」

と答えました。

ファリサイ派の人々と言うのは、律法に何が書いてあるか、それを知っていることもさることながら、彼らは、預言書を始め、聖書を知っている積もりでした。 そうであれば、イザヤ書のメシア預言には、イザヤ書35章5節に、

「**その時、見えない人の目が開き、聞こえないひとの耳が開く。**」

とあり、29章18節、42章7節にも、盲人の目が開き、見えるようになるのは、来るべきメシアの徴であると預言されています。 イエス様が、遣わされた者を意味する、シロアムに行きなさいと言われ、その言葉に従った時に、目が開いたのですから、イザヤの預言の成就と考えるのが、神様を信じる者の考える事でしょう。

しかし、律法の番人と言うのは、違反を捜すことにしか心が向いていませんから、16節を見ますと、ファリサイ派の人々の中には、

「**その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない。**」

と言っています。 この人が癒されたのは、安息日であったと記されています。
そう言う人もいれば、

「**どうして罪のある人間が、こんなしるしを行う事ができるだろうか。**」

と言う者もいた。 こうして彼らの間で意見が分かれたとあります。 そのために本人に尋ねる事にしたのです。

「**お前はあの人をどう思うのか。**」

そこで彼は、この様なことは神様の力に依ると確信して、

「**あの方は預言者です。**」

と答えました。 その意味は終末に現れる、かのモーセのような預言者を意味しています。
その答えに、ファリサイ派を始め、信仰者が納得したでしょうか。 彼らは全く神様の前に遜る(へりくだる)事をしていません。 唯、自分達の考えを言い合い、議論しているばかりです。

信仰の問題は、議論で答えが得られるものではありません。 18節に、彼らは遂に目が見える様になった人の両親を呼び出して訊ねました。
しかし、両親は、自分達の上に火の粉が降りかからないように、自分達の息子である事は証言しますが、イエス様については回答を避け、自分達の立場を守っています。

答えを見出せないと言うよりも、自分達を正当化する為の議論は、最初に戻って、24節に、

「**さて、ユダヤ人たちは、盲人であっ人をもう一度呼び出して言った。『神の前で正直に答えなさい。 わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。』**」

と、自分達の意に従うように圧力をかけています。
人は自分を正当化するために、神の名を使うと言われますが、

『神様の名を使う時は、
神様の前に出ていない。』

という事がここで良く分かります。

そんな彼らに対して、目が開かれた男性は、心の目も開かれて、神様の前に立って毅然として答えました。

「**あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。 唯一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えると言うことです。**」

自分の身に成されたこと、起こった事はいくら他人から否定されても、否定することは出来ません。
見えなかった者が見える様になった。 何のためでしょうか。 それは**見なければならない世界**があると言う事を、神様が**示しておられる**のです。

彼は目が開かれると共に、真理が見えてきました。 彼は、自分達は、モーセの弟子だと豪語して、モーセの座に坐って、自分を正当化し、人を裁いて、自己満足と言う闇の中にいる人達に、自分が受けた神の光を放ちます。
30節に、彼は答えて言いました。

「**あの方が何処からこられたのか、あなた方がご存知ないとは、実に不思議です。 あの**

方は、わたしの目を開けて下さったのに。
神は罪人の言うことはお聞きにならないと、
わたしたちは承知しています。 しかし、神を
あがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞
きになります。」
「生まれつき見えなかった者の目を開けた人
がいるということなど、これまで一度も聞いた
ことがありません。 あの方が神のもとから来
られたのでなければ、何もお出来にならな
かったはずです。」
と、彼は少しも臆することなく、自分の命の恩人を、滔々(とうとう)と証ししました。

彼はその結果、外に、つまり、信仰共同体から追放されました。 しかし、彼の心は爽やかでした。 そこに、イエス様の方から、彼を求めてやってこられました。 イエス様は彼に出会うと、
「あなたは人の子を信じるか。」
とお尋ねになりました。 人の子とは、救い主メシアを意味する言葉です。 そこで男性が、
「主よ、その方はどんな人ですか。 その方を
信じたいのですが。」
と答えますと、イエス様は、
「あなたは、もうその人を見ている。 あなたと
話しているのが、その人だ。」
と御自身を明かされました。 男性は喜びに溢れて、
「主よ、信じます。」
と言って、ひざまづくと、イエス様は39節に、
「わたしがこの世に来たのは、
裁(さば)くためである。
と言われました。 ここでの**裁く**は、3章17節の
「神が御子を世に遣わされたのは、
世を裁(さば)くためではなく、」
の**裁く**の意味ではありません。
詳訳聖書では、
「人を、わたしを信じる者と、私を退ける者と
の間に、分裂を起こすための、分離者として、
この世に来た。」
と説明されています。 信じる者と信じない者とが、捌(さば)かれること、つまり、選り分けられることを意味しています。

さて、最初の問いに戻って、私達は何を神の**御業だと信じる**のでしょうか。 勿論目が開かれることは、神様の御業です。 しかし、イエス様が求められた神の御業は、**イエス様を救い主と信じ、 全存在をお委ねすること**です。
イエス様はヨハネ6章29節で、
「神がお遣わしになった者を信じること。
それが神の業である。」
と言われました。 **イエス・キリストを信じる以外に、永遠の命を受けることはできません。** 見えると言い張って、罪の中に止まるのか、イエス様を信じて、永遠の命を受けるのか、人はどちらかの道しかありません。

神の御業を、見えるものに求めるのではなくて、イエス・キリストを信じる信仰に於いて、神様に全信頼し、**天を見つめて歩み抜いて行く**ところに、**真の神の御業は現された**のです。 私達はもう一度救いの原点にたち帰り、私達の罪を負って、**身代わりの十字架に架かり、御救いを与えて下さったイエス様**に、自分の全存在を賭けて委ね、**信じ抜いて**参りましょう。

お祈りをいたします。
憐れみ深い天の父なる神様
罪の滅びに向かっていることも分からないまま
自分勝手に生きていた私達を、
イエス様に出会わせて下さった事を
感謝いたします。

イエス・キリストの十字架の贖いにより、
御子を信じる者に永遠の命を
お与えくださる事こそ、
人類にあり得ないことを成して下さった
神様の御業です。

そのイエス・キリストに全信頼し、
信じ従って行くことを、
イエス様は神の御業だと言われました。
私達を、一途に神様を信じ抜いて行く者と
ならせて下さい。

尊い救い主、イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。